

(様式4)

## 学 位 論 文 の 内 容 の 要 旨

氏 名 京田亜由美 印

(学位論文のタイトル)

The World that Appears As One is Deprived of Life:

A Qualitative Study of the Lived Experiences of Terminal Cancer Patients

(人生を奪われた後に見えてくる世界：終末期がん患者の生きた体験の質的研究)

(学位論文の要旨)

終末期がん患者は、逃れられない自らの死の近づきへの認識から、生と死の意味を問い直す必要に迫られる。しかしながら、これまで終末期がん患者の生と死に対する認識は明らかにされていない。そのため、患者の生と死にどのように接近するかは現場の看護師の力量に委ねられており、がん看護を担う看護師は、終末期がん患者とのコミュニケーションに強い困難感を抱いている。したがって、終末期患者へのインタビューを通じて、患者の生と死への認識を明らかにする質的研究が急務である。そこで、本研究の目的は、逃れられない自らの死の近づきを認識した終末期がん患者の生と死に関する体験を明らかにすることである。

対象者は、在宅緩和ケア、緩和ケア病棟(PCU)、一般病棟緩和ケアチームのサポートを受けている終末期がん患者18名であった。データ収集は、非構造的面接調査を各対象者2～5回を実施した。最初の質問は、「これまでどのような人生を送り、がん罹患し、現在どのような感情、考えを持っているか」とし、対象者の自由な語りを促した。初回面接では信頼関係の構築とライフストーリーの把握、2回目以降では、病気体験や生と死に関連するあいまいな部分の明確化を行った。分析は、Giorgiの現象学的心理学アプローチの手法を用い、5段階の分析を行った。本研究は、倫理審査の承認を受け実施した。面接は合計53回、3,118分であった。

分析の結果、在宅、PCU、一般病棟で緩和ケアを受けている終末期がん患者の生と死の体験の構造として、「死ぬほどの苦しみの体験が故の**普通の生活**の微かな光への新たな感謝」、「逃れられない死への認識とせめて**穏やかに**逝きたいという願い」、「**愛する人や自分たち**のように苦しんでいる患者のために役立ちたいという希望」の3つのテーマが導き出された。対象者は、積極的治療中の強い身体的症状により、食べられず、寝ることもできなかつた体験から、少しでもおいしく食べられ、苦痛を感じずに眠れるだけでも「普通の生活」ができていると感じていた。いつまたあの苦しみが来るのかと恐れながら、せめて穏やかな終焉が来ることを望んでいた。対象者は、生きているだけで家族のためになると考えたり、自分たちのように苦しむであろう他の終末期患者のために何かをすることができると考える

ことで、生きる力を感じていた。

終末期がん患者にとって生と死は対立しておらず、重なり合いながら、共に希望につながるものが明らかになり、ここに本研究の新規性がある。看護師は患者の生と死が重なっていることに意識しながら、患者と死について積極的に話し合うことが必要である。加えて看護師は、患者の普通の生活を送りながら穏やかに死を迎えたいという望みを支えながら、終末期がん患者同士をつなぐメッセンジャーとなることが求められている。本研究の成果により、看護師が、患者の生と死の両方の感情や考えを当たり前のように話し合う助けとなると期待される。